



▲昭和10年洪水の浸水状況  
(四万十市百笑)



昭和10年洪水の浸水状況▶  
(四万十市中村)

## 背景

昭和10年(1935)8月27日、台風による降雨が強まり、渡川(四万十川)と後川が甚だしく増水しました。具同では28日午前7時に3.70mの水位が、翌29日には最高12.07mに達しました。27日の夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海のようになりました。また、破堤したのが夕方満水が夜中であり、死にもぐるいの阿鼻叫喚の中での避難にもかかわらず、一人の死者も出なかったことは全くの驚異であると伝えられています。

## アクセス

一条神社

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約1.5km
- 四万十市中村本町
- 緯度経度 北緯32度59分27秒, 東経132度55分03秒



「全没した中村の町は、阿鼻叫喚のちまたと化した」と昭和十一年(一九三六)幡多郡東山村(現在の四万十市安並付近)の助役は語っています。

「いよいよ大時化となったぞ」渡川と後川の増水がはなはだしいので、老人たちが「明治二十三年(一八九〇)ほどの洪水になるぞ」と言いだした。水位はますます高くなる。拙宅(安並にあった自宅)の下の民家の荷上げの手伝い、豪雨の中の作業はみんな懸命であった。人は皆高い家に避難した。夕方になってその家も全部流れてしまった。このとき初めて家の流れるさまを見た。屋根の丸瓦が沈むまでは流れないが、屋根の瓦が見えなくなると浮いて流れる、無惨な光景であった。(中略)

それまでに二七日の夕方、急に後川右岸が破堤して、中村町(現在の四万十市中村付近)に洪水が流れる椿事が起こった。町の警察、消防団、幡多支庁、町役場は驚いて、警察は半鐘をならして緊急避難を伝えた。驚いた町民は夕方の雨中、奔流の中を古城山、一条神社、天神さま、土生山へ我先と避難。(中略)町の人達も明日は大水で堤防が切れるという警報に、死にもぐるいであったという。その晩公園山(古城山)その他では、野宿、町内全域停電で、真暗闇の中を懐中電灯をたよりに各自助け合いつつ避難した。夜中の懐中電灯の光とざわめきと叫びは夜の明けするまで公園山に続いた。阿鼻叫喚とはこのことか、後川を隔てた私の家には台風の中とぎれとぎれに聞こえた。今でも私の耳の中には、その声が聞こえてくるようである。